

文芸時評

沼野 充義

危険な事態を招き寄せて平気な人々には、「想像力のスイッチ」を切る能力が備わっている、と指摘する。

この不安な日々、ヴォルフは「放射線の照射を受けて、わたしが書いた原稿はみるみる色褪せ、なかには消えていくものも」あったと痛いほど率直に告白する。ひるがえってわが国の現在に目を転じたとき、いま書かれている文学作品は「みるみる色褪せ」ていきはしないだろうか？

『群像』では、人気推理作家の伊坂幸太郎が「PK」と

にはなっているが、謎の背後にある「得体の知れない大きな力」と、それに巻き込まれてそれぞれ選択を迫られるサッカー選手、作家、政治家の

「臆病」と「勇氣」を問う。まどぎ珍しいくらい真面目な作品でもある。臆病だけでなく、勇氣もまた「伝染」するという作中人物の言葉が感動的だ。登場人物の一人である大臣は、今の子供たちは「二十一年後のことを考えた時、わくわくしているのか？」と問いかけるが、これは作家が今の日本に投げかけた言葉でもあるだろう。

ト性を重視した読み物風の展開にはなっているが、何が本物の生であって何が偽物なのか、という真率な問いが終始鳴り響いている。

綿矢りさの「トイレの懺悔室」(『文藝』夏季号)は、小品ながらこの作家の新境地を示す意欲作。物語の発端は、語り手の「おれ」が小学



綿矢りさ氏

けているのではないかと、思った。

職場を舞台にした印象的な作品が二つあった。一つは荻世いをらの短編「粉」(『すばる』)。正体不明の白い粉を機械が毎日何かが生産するのを黙って管理するだけ、という簡単な仕事を、ひとり黙々と続ける男を描いた作品である。もう一つは小山田浩子の中編「いこぼれのむし」(『新潮』)。こちらは複数の視点から、「瀬戸内プランツ工業株式会社」に働く社員たちの日常を立体的に描いた作品で、職場の女性どうしの微妙な関係や心理の動きが緻密に書き込まれている。その一方で、うつ病と見なされて辞職する女性の生活にはおぞましい虫やその卵のイメージがつきまとう。どちらの作品もリアルでありながら、不条理感を漂わせている。

伊坂幸太郎「臆病」と「勇氣」を問う 「PK」と「勇氣」を問う 働く女性の心緻密に 小山田浩子「いこぼれのむし」

福島第一原発の事故の先行きがいまだに見えない状況の中で、思い出した文学作品がある。旧東ドイツの女性作家、クリスタ・ヴォルフ(一九二九年生まれ)の『チェルノブイリ原発事故』(保坂一夫訳、恒文社)だ。原著が書かれたのは一九八七年だが、いま読み返してみると、驚くほど生々しく現在の日本の状況に関わってくる内容であり、「想定」を超えた異常事態に文学者の想像力がいかに向き合つていけるか、鮮やかに示している。今こそ読まれるべき本ではないかと思

放射能汚染の恐怖の中でつづられた身辺雑記風の小説だが、原子力の「平和利用」というユートピアが「必然的に怪物を生み出すものなのではないか」というヴォルフの問いかけは重い。彼女は危険域を「三〇キロメートルの範囲に指定している」のは誰なのか、自然も自然ならざるものも「わたしたちの十進法とおりにはいかない」のではないかと、と問い続ける。そして、



伊坂幸太郎氏

『文藝』夏季号には、中村文則が中編「王国」を発表している。以前「掏摸」で切り拓いた巨大な犯罪組織との接点の領域をさらに展開した趣の作品で、今回の主役は児童養護施設出身の女性である。彼女は巨大な背後関係があるらしい闇組織に雇われて社会的身分のある男たちを色仕掛けで次々におとし入れていくのだが、二つの組織の間に挟まれて、窮地に陥る。そして、間一髪のところ逃げて果たず。エンターテインメン

『文藝』夏季号には、中村文則が中編「王国」を発表している。以前「掏摸」で切り拓いた巨大な犯罪組織との接点の領域をさらに展開した趣の作品で、今回の主役は児童養護施設出身の女性である。彼女は巨大な背後関係があるらしい闇組織に雇われて社会的身分のある男たちを色仕掛けで次々におとし入れていくのだが、二つの組織の間に挟まれて、窮地に陥る。そして、間一髪のところ逃げて果たず。エンターテインメン

生のころ知り合った近所の「親父」に、友人たちとともにキリスト教の儀式の真似ごとの「懺悔」をさせられるという出来事である。そして、自分の犯した罪を告白することを通じて、支配者・奴隷という、ときに常軌を逸した関係が生まれるのだが、「もっとも必要な最大の存在、はるか上空からすべてを見ている存在」が省略されてしまふ、という結論に至る。この作品は、今の日本文学に欠如しがちな視点をつかみか



加藤典洋氏

波小波大

好評の小説群の一系列に『先生小説』がある。島田雅彦『彼岸先生』、川上弘美『センチの靴』、伊集院静『機関車先生』など。無条件に倚りかかれる川上の先生、黙っているが頼もしい指導力の先生はアンチ・モデルだ、やはり「人生の教師」

だ。いずれも心の拠り所となってくれる。『機関車先生』の大人版とも読める伊集院の『いねむり先生』(集英社)先生小説の安堵感

示でもある。先生は、ナルコレプシー(眠り病)だった色川武大こと阿佐田哲也がモデル。不幸な過去の後遺症になやむ語り手「ボク」を、先生はどこまでも温かく許容し、ふしぎな安堵感で包みこむ。だらしない、ぐにやぐにやのよう

が、ごく自然に「ボク」を立ち直らせてくれる。練達の作者の筆は、抑制された表現に、今日珍しい善意の人の体温を深ぶかと滲透させる。読者もまた、こころよい安堵感にひたれる(それゆえ先生の死の悲しみも深い)。『荒んだこの時代ゆえに、先生小説の人間くさい旨味は、読者に求められているのではない

(めまの・みつよし)東京大学教授、ロシア東欧文学・現代文芸論